2016年9月1日八街教会メッセージ

聖書箇所：マルコの福音書4:1-20

　　　　　　　　　　　　　　**「種蒔く人の喩え」**

　本日の聖書箇所は「種蒔く人の喩え」として知られている箇所です。この箇所は、マタイ、ルカ福音書にも並行記事があります。内容的にほぼ同じです。共観福音書の成立順序についてはマルコが最も古く、その数十年後にマルコ福音書と他の独自資料を参考に、異なる読者を想定し、マタイ、ルカ福音書が書かれた、という説がほぼ承認されています。これを前提に3つの並行記事をみますと、ルカ福音書はマルコ福音書の記事とほぼ完全に同じと言っても良いと思いますが、ルカ福音書の方はイザヤ書からの引用の形をとっていない、とかマルコが「サタン」と言っているところが「悪魔」と言われているとか、マルコが「三十倍、六十倍、百倍」というヘブル語的表現をしているところが、「しっかり守り」とかいうような強調表現に変えられている、という点が相違です。ルカ福音書は異邦人キリスト者向けに書かれた文書ですから、ヘブル人的表現はなくしたという事でしょう。マルコとマタイを比較すると、マタイの方はイザヤ書からの引用がマルコよりかなり長くなっています。またマタイの方にはユダヤ人的理屈付けが目立ちます。天の奥義について語ったところで、「持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです」という屁理屈的な理由づけも追加しています。マタイ福音書はユダヤ人キリスト者に向けた福音書ですから、ユダヤ人特有の聖書の言葉による理屈付けを行っているのだ、と言えます。いづれにしろ、ルカ、マタイ福音書の記事はマルコ福音書の記述を他の伝承等を参考に記したもの、という範囲に入るようです。

実はこの「種蒔く人の喩え」と類似した話が他の文書にあります。これはナグ・ハマディ文書と言い1945年にエジプトのナイル川上流テーベの町の近くで偶然発見された文書のなかにある「トマス福音書」と称するものの中にあります。これはコプト語で書かれていますが、この元になったギリシャ語の文書があったと考えられています。これは使徒トマスによる、との言い伝えがある、イエス・キリストの語録集です。初期キリスト教会からグノーシスとして異端とされた教派の文書です。しかし、ここに記載された語録の一部はそもそもは古い起源である可能性はあります。その九をお読みします。「イエスが言った。「見よ、種まきが出て行った。彼はその手に（種を）満たしてまいた。いくつかは満ちに落ちた。鳥が来て、それらを食べてしまった。他の種は岩地に落ちた。それが種をふさぎ、虫がそれらを食べてしまった。そして、ほかの種は茨に落ちた。それが種をふさぎ、虫がそれらを食べてしまった。そしてほかの種は良い地に落ちた。そしてそれは良い実を天に向かって出した。それは六十倍、百二十倍になった」とあります。マルコ福音書の前半部分4:1-8までのみに対応します。しかし、表現はかなり異なっています。茨に落ちた種はマルコでは日が当たらなくなり実を結ばなくなったのですがトマスでは虫が食べてしまった、となっています。またマルコでの「三十倍、六十倍、百倍」はトマスでは「六十倍、百二十倍」になっています。トマス福音書の語録がマルコ福音書の書き換えとは到底考えられません。むしろ、トマス福音書に記された出来事が、いくつかの伝承となって各所に広がり、マルコ福音書のもとになった伝承、トマス福音書に記された伝承等になっていったのであろう、と推測されます。トマス福音書もルカ福音書と同様、マルコ4:6「しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった」に対応する表現がないことから、トマス福音書における伝承はルカ福音書の独自資料としての伝承と同じ源泉ではないか、という見方もあるけれどもかなり無理した理解と言わざるを得ないと思われます。むしろ、トマス福音書の伝承は、マルコを始めとする共観福音書の伝承とは異なり、より古い伝承に属する、と理解すべきと思われます。

このトマス福音書の記述と共観福音書の記述を比較して大きな違いは、トマス福音書の語録はマルコ福音書で言えば4:1-8に対応するのみであり、4:9-20までの付加的部分については全く存在しません。この理由もあり、主イエスのおっしゃられた譬えは4:1-8までの部分のみでそのあとの部分については後の誰かが付加したものではないか、という意見が神学者の間では有力です。もちろん、その可能性がない、とは言いませんが、4:9以降を主イエスの現実の言葉にはなかったものを誰かが追加したのだ、と断言するのは危険だと思います。主イエスのたとえ話においてこのような解釈の仕方までおっしゃられている例はほかにはないので、後世の追加という理解にそれなりの理由はありますが、聖書を読む時にそのように人間の解釈によって主の言葉の範囲を限定してしまって良いのか、という根本問題があります。私は、聖書の記述の歴史性を否定する決定的理由でもない限り、極力文字表現そのものをそのまま解釈するように努めるべきである、と考えます。おそらく、4:9以降の趣旨の何らかの主イエスの言葉があったけれど、伝承の上ではトマス福音書のようにこの部分が全くない伝承と、マルコ福音のようにこの部分を含む伝承とに分岐して行ったと考えることができる、と思います。同一事象複数伝承と言う訳です。

しかし、4:1-9の喩え話の部分が中心であり、4:10以降は付随的なお話である、ということはわきまえておくべきことです。そもそも4:1-20までの「種蒔く人の喩え」は3つの部分に分けられます。最初は41-9までの喩え話の本体です。次は4:10-12であり、「イスラエルはこの譬え話を理解しない」ということをイザヤ書を引用しつつおっしゃられています。そして3つ目の段落が4:13-20です。ここでは、当初の喩え話を解説しています。「種蒔く人の喩え」、「たとえを用いて話す理由」、「種蒔く人の喩えの説明」の３つです。この「理由」と「説明」の２つはその内容からして、喩えそのものとはだいぶ違います。なにか特別な理由があってこのような追加的お話しがあったと考えるべきです。まず、これらの部分を忘れ、4:1-9に焦点をあわせて主の喩えを見てみたいと思います。まずこのお話は何を伝えようとしているのでしょう。そもそもこの4章は「神の国」はどのようなところであるかを伝えようとしている箇所です。この種蒔く人の喩えのすぐあとに出てくるお話は燭台の上のあかりであり、これは「神の国」がこの明りのように今来ている、と言わんとしたものです。その次は「地に蒔かれた種」の話で、人間の手を加えなくとも自ずから育っていく、と言われています。これは神の創造された本来の世界、即ち「神の国」の在り方を語っています。要するに、4章は「神の国」はどのようなもので、その国は既に来ているのだ、ということを告げている箇所です。これを念頭に主のたとえ話を読み直すと、もっとも重要なことは「良い地に落ちた種」の所である、と言うべきです。

ミレーの「種蒔く人」の絵をご覧になった方も多いとおもいますが、どうも主イエスの頃の種蒔きは、立って歩きながら種を播いていく方法だったようです。この種を播いた後、土をかぶせたりしたのでしょう。注意すべき点があります。この道端に落ちた種、岩地に落ちた種、いばらの中に落ちた種は単数形だと言う点です。これに対し、善い地に落ちた種は複数形です。「種蒔く人」が畑一帯に種を播くときたまたま3つの種が、道端、岩地、いばらのところに落ちたのですが、それらは当然うまく育たなかった。しかし、残りの種すべてはちゃんと畑にまかれ、芽を出し、育ち多くの実をならした、というのです。この多くの実のなったところが「神の国」なのです。これは大変なことを言っています。ガリラヤ湖の岸辺でイエス様は船に乗り民衆は岸辺におります。ここで、民衆をまえにして良い地におちた種の話をされたのです。これはこの民衆のなかに「神の国」がある、と言っているみたいなものです。ここでの種は「福音の告げ知らせ」です。「神の国」の到来の告げ知らせです。たまたま変なところに行った福音の告げ知らせは無益に終わったかもしれないが、大部分の告げ知らせは、これを聞く人々の所に告げ知らされ、大きな恵みの賜物として育ち、祝福された「神の国」のしるしとなる、と言う訳です。その「良い地は」まさに今、これを聞いている皆のなかにある、というのです。いずれ実現するであろう「神の国」「はこのような恵みにあふれた地ですよ、という訓示を述べているのではないのです。もちろん、ここで思い出すのはイエス様の宣教の第一声です。1:15「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」です。この「神の国は近くなった」という表現は「近ずく」の現在完了形であり、近づいた結果が現在に反映している、と解釈できます。この部分は「神の国」が既に来ているのか未だ到来していないのか、ということで「既に、未だ」の問題として議論の多いところです。答えは両方、と解釈するしかありません。このマルコ4:1-9の喩えのところでは「神の国」は主イエスとともにまさにここにきている、と理解すべきです。しかもそれを、貧しく、罪深い民衆の前で語られたのです。このことを聞いていた民衆が理解したかどうかはわかりません。おそらく理解されなかったでしょう。しかし、この方は自分たち民衆に喜びのメッセージを語っていることは事実のようだ、という事だけは伝わったのではないでしょうか。もちろん、今ここにある我々にも同様に語られているのです。私たちの中に遭って福音の言葉は育ち、実を結んでいく、とおっしゃっているのです。

譬え話の内容は8節で終わっているのですが9節に「聞く耳のある者は聞きなさい」とあります。これはマタイ福音書では「耳のある者は聞きなさい」となっています。この表現は箴言15:31にでてきます。「いのちに至る叱責を聞く耳のある者は、 知恵のある者の間に宿る」とあります。聞く耳のある者は知恵者の一人に数えられる、ということです。“あなたたちが神の知恵につき知っている者であればわかるだろう”と言っています。民衆は実は理解していないという事を主イエスは重々ご存じであったということが暗示されています。またこの言い方は新約聖書のいくつかの場所で使用されており、特に黙示録では盛んに使われます。「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」という形で使われています。終わりの日のことをちゃんと聞きなさい、ということです。イスラエルの伝統で言う「聞く」は単に耳で聞くという事だけではなく、その聞いたことに従う、という意味も同時に含んでいます。また、この表現を聞くとおそらくすべてのユダヤ人はあのシェマーを思い浮かべるでしょう。「聞け、イスラエル」で始まる、イスラエル共通の祈りの出だしです。マルコ4:1-8での喩え話の最後に“聞け、イスラエル。神の国は近づいた。今や、神の国は既にあなた達の中に、私と共にある”とおっしゃっておられるのです。さらに言えばこの9節は2節の「よく聞きなさい」に呼応した表現です。この「良く聞きなさい」は直訳しますと「聞きなさい、見よ」です。「見よ」の方は旧約でしばしば使われる表現でヘブル語で「hinnne:」、ギリシャ語で「idu:」です。文字通り目で見るという意味からもっと広く注目せよ、というような意味合いで使われる言葉です。そのため新改訳では「よく聞きなさい」という訳にしたのだろう、と思います。「見よ、この人を」の「見よ」です。個人的にはやはり直訳で「聞きなさい。見よ」のほうが好きです。いずれにせよ、3節の「聞きなさい」と9節の「聞きなさい」で挟まれた部分がメッセージの中心であることがわかります。旧約聖書学では「枠構造」と言っています。

では10節以降をみてみましょう。10節の表現は少々理解困難です。まず、「いつもつき従っている人たち」とはだれなのか、という問題です。また質問したのはこの「いつもつき従っている人たち」なのか、十二弟子も一緒に質問したのか、です。この「いつもつき従っている人たち」とは十二弟子ではないがいつもイエス様につき従っている人の事でしょう。この「十二弟子とともに」という表現は、十二弟子と共にいつもつき従っている人々が質問したとも、十二弟子と一緒になって質問した、とも解釈できます。文章の流れからして、十二弟子も一緒に質問した、と理解すべきでしょう。ということは十二弟子もこの主イエスの喩え話を理解していなかった、ということです。「聞く耳のある者は聞きなさい」とはいっても、十二弟子も含め、だれも「聞く耳」を持って居なかった、ということです。神の国がここに現出しているのだ、ということを十二弟子やそれと一緒にイエス様につき従っていた者達も理解していなかったという事です。次にイエス様はあなた方にしか神の奥義は知らされない、ということをイザヤ書引用しつつ告げています。聖書批評学の学者たちは、ここでは、異邦人伝道に苦闘している初期教会の苦難が反映しているのだ、ということを言っています。そしてこれ以降の箇所は主イエスの言葉とは無関係に初期教会が追加した箇所だと言っています。安易な説明方法だと思います。伝承には創造された部分が入り込むことがあることを否定しませんが、イエス様が何も言っていないところで、このようなちゃんとした伝承が発生することは感がられません。なにかの契機になる言葉があって、10節以下の伝承が発生したと考えるべきです。この10-12節の記述から推測するに、イエス様は先々の「神の国」宣教のなかで弟子たちが苦難に直面することを見越し、「見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて許されることの無い」多くの人が居ることはやむを得ない、というより、神様がそうされているのだ、ということを言っているのだ、と解釈できます。弟子たちに対する慰めの言葉を掛けられているのです。1-10のたとえ話の本体は岸辺の民衆に対して語られています。「神の国」の到来を告げ、喜びの福音に聞き従うことを呼びかけています。しかし、10節以降は違います。10節に「イエスだけになったとき」とありますが、これは、この部分の動詞が単数形であることから主語はイエス様であるとの前提で翻訳された結果です。しかし、この「だけ」の部分は明らかに複数形ねあり、「彼らだけ」というのが直訳です。従って、イエス様と十二弟子を始めとする極めて近い人々だけになった時、と理解すべきです。その彼らに、慰めの言葉を騙られたのです。これは現代の伝道者たち、また主の証人として伝道に努めている人々にも語られていることです。聞く耳を持たない者が沢山いるのは神様がそうされているのです。私たちにはわからない目的の為です。しかし、しかし、私たちは主の述べられる約束があります。その約束が13節以降の種蒔く人の喩えの説明部分です。

そこに行く前に、このイザヤ書からの引用を見てみましょう。マルコ福音書の該当部分をもう一度お読みします。『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため』とあります。イザヤ書6:9-10は「行って、この民に言え。 『聞き続けよ。だが悟るな。 見続けよ。だが知るな。』/この民の心を肥え鈍らせ、 その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。 自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、 自分の心で悟らず、 立ち返っていやされることのないように。」とあります。イザヤ書のこの部分のギリシャ語訳は「あなた達はまさに聞くべきだ。しかし、あなた達は決して悟ってはならない。そしてあなた達はまさに見るべきだ。しかしあなた達は決して理解してはならない。/この人々の心はひどいものとなり、そしてその耳は聞くに鈍く、そしてその目は閉じたままである。彼らが目で見ることをせず、耳で聞くことをせず、心で悟ることをせず、そして回心せず、また私が彼らを救う事のないためである」となります。ヘブル語で「---為である」という表現は結果を示す独特の表現です。英語でも「so that」が「---のために」と言う意味と「---の結果」と言う意味の両方あるのと似ています。更に、マタイ福音書での種蒔く人の喩え話、の部分では「こうしてイザヤの告げた預言が彼らの上に実現したのです。 『あなたがたは確かに聞きはするが、 決して悟らない。 確かに見てはいるが、決してわからない。/この民の心は鈍くなり、 その耳は遠く、 目はつぶっているからである。 それは、彼らがその目で見、その耳で聞き、 その心で悟って立ち返り、 わたしにいやされることのないためである。』」とあります。ルカ福音書では引用の形をとった表現はありません。これらを比較しますと、マタイ福音書の引用が一番イザヤ書のギリシャ語訳に似ているように見えます。マルコ福音書の引用はヘブル語原文を参照し自由に引用した、といえるでしょう。おそらく、イザヤ書のこの部分は、一般の民衆にはマルコ福音書にあるような簡単な表現で伝えられていた、のであろう、と思われます。マルコ福音書のこの部分を読み替えますと「彼らは確かに見るには見るがわからない。聞くには聞くが悟らない。そのため、神に立ち帰ることもなく、神より赦されることもないのです」となります。ちなみに新改訳聖書で「悔い改め」と訳されている言葉はギリシャ語では「epistre:fo」という言葉で、戻る、とか帰る、という意味で「悔いる」という意味合いは全くありません。何もかも「悔い改め」と訳すのは感心できません。マルコ1:13の「悔い改めて福音を信ぜよ」の悔い改め、ギリシャ語の「metanoe:wo」とは異なる単語です。

では13節以降でイエス様は弟子たちの宣教にどのような困難が待ち構えている、とおっしゃったのでしょうか。ここに出てくる良い地以外の喩えに該当する場所はいつの時代にもありますが、イエス様が語られたその時代ではどのような人たちのことでしょうか。想像力を働かせつつ考えてみましょう。種が「道端に蒔かれる」のはどういう状態でしょう。神の国が到来した、とどこかで言われていても「関係ないや」と言っている人たちです。イスラエルの民でそこそこの生活をしており、特別幸せという訳でもないが、大変不幸な状態にある人からみれば自分は良い方だ、と思っている人です。おそらく、イスラエルの政治的指導層であったサドカイ人を消極的に支持し、自分の身に災厄が降りかからなければ、別にいいや、と思っている人々です。サドカイ派シンパとでも言いましょうか。そのような人々に語られた福音は放置され、遂には忘れ去られてしまいます。次に岩地に蒔かれる種というのはどうでしょう。岩地というのは文字通り岩ばかり、と言うのではなく、土をちょっと掘るとすぐ、岩肌がでてくるような土地ということです。福音の言葉を聞いてすぐ喜ぶのですが、すぐ覚めて、一寸した逆流的状況になると“やはりだめなんだ”と思いあきらめてしまう人々です。滅しやすく冷めやすい人という事でしょう。エッセネ派シンパの人たちがこの様であったかもしれません。いつも信仰深くありたい、と願いエッセネ派の人々を尊敬しているが、エッセネ派のように隠遁生活をするまでに踏み切ることはできない人です。福音を聞いて「そうだそうだ。私も頑張らにゃー」と思うまでは良いのですが、どうすれば良いのかもわからず、右往左往して結局「よくわからないや」と言って証人の歩みには踏み出せない人です。次にいばらの中に蒔かれた種はどうでしょう。当時、律法の解釈に長けた人達であるラビは民衆に「律法とその解釈をちゃんと守りなさい。皆がそうすればこのイスラエルに神からの祝福があります」と説き、民衆運動を展開していました。その集団がパリサイ派と呼ばれる人々でした。このいばらの茂った地はこのパリサイ派シンパの人々と考えることもできるでしょう。善意の人々でありパリサイ派の人々のようになりたい、と思っているのですが、日々の暮らしの中で厳格に律法とその解釈を守ることはできず、“このくらいしょうがないや。赦してもらえるだろう“と思っている人たちです。正直なところ、日々のわずらいが沢山あり、イエス様の福音のメッセージなど真面目に聞いてはおれない、と思っている人たちです。これら、サドカイ派シンパ、エッセネ派シンパ、パリサイ派シンパの人たちに御言葉を伝えても、その時は、何事も起きません。全く徒労に見えると思います。実はわたくしたちもほとんどがこの3つの内のどれかです。サドカイ派、エッセネ派、パリサイ派、というのは今で言えば異なる学説を唱えている学者たちのことで、大部分の民はいずれかのシンパではあっても、具体的にこれらの派の一人と言う訳ではありません。イエス様は自分がこの地上に居なくなってからのことを念頭に語っていたのだと思います。

これらのシンパ達に語りかけても無駄に見えるのは解っている話だと、言われるのです。では、最後の実を結ぶ「良い地」はどこにあるのでしょう。どのような人に宣教すると大いなる実を結ぶことになるのでしょう。イエス様の念頭にあったのは、イスラエルの範囲を超えた所だったのではないでしょうか。当時の言葉で言えば異邦人の地、ということになります。神により選ばれたイスラエルの民には福音は受け入れられず、むしろ、イスラエルに忌み嫌われた異邦人のところで福音の花は開く、という訳です。この逆説こそ、11節で言われる「神の国の奥義」なのだと思います。そしてこの奥義は譬えによって語られるのです。では福音が育たなかったイスラエルの民はどうなってしまうのでしょうか。そのまま放置されるはずはありません。神様の救いに例外が合うはずがありません。異邦人に述べ伝えられた宣教の言葉は最後にはイスラエルに戻ってきます。どのようには解りませんがイスラエルの地が「良い地」に変えられ終わりの時となるのです。ここで挙げられた３つの例と最後の「良い土地」は時間的な順序だという解釈もありうる解釈だと思います。全く実を結ばないように見えていた地がいつの日か、「良い地」に変えられる、と言う訳です。主イエスの弟子たちが宣教の中でも実がならない、と嘆きの言葉しかない時、そして自分たちの努力が全く徒労である、と思ったその時、神様の奇跡の働きが示される、というのです。福音の言葉が三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶときとなるのです。そして神の平和が支配する「神の国」の完成となるのです。これは神様の約束です。主イエスが弟子たちにそのような時が来る、と約束されています。これこそ、主イエスの証人にとっての大いなる慰めです。くじけても良いのです。落胆しても良いのです。この希望に勇気を奮い起こされ主の日を待つ希望に賭けましょう。